慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ語圏における公共圏の歴史的展開 : 近代ジャーナリズムの文化史的諸前提
Sub Title	Historical developments of the public sphere in Germany. : cultural-historical preconditions of modern journalism
Author	西尾, 宇広(Nishio, Takahiro)
Publisher	
Publication year	2022
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2021.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究は「公共圏」という社会的カテゴリーを規定する文化史的諸前提の一端を、18・19世紀のドイツ文学に関する事例研究に基づき、「時間性」と「虚構性」という観点から明らかにした。第一に、当時の作家の自己理解には、流行の変転の中で消費される出版物の刹那性と、後世にまで読み継がれる文学作品の永続性という、二つの時間意識の間の振幅が確認できる。第二に、部分的にそれとも連動する〈真実〉の流動性と不変性への意識には、文学の虚構性に対する反省が含意されている。ここには、真理と理性を奉じる啓蒙主義時代に成立した近代的公共圏にとって、逆説的にも文学という虚構による媒介が不可欠の構成要素であった可能性が窺われる。 This research has illuminated some of the cultural-historical preconditions of the "public sphere" from the standpoints of "temporality" and "fictionality", by means of the case studies of the 18th- and 19th-century German literature. In the self-understanding of the writers of that time, one can first point out a kind of oscillation between two time-consciousnesses: the instantaneousness of publications consumed in ceaselessly changing modes and the eternity of the literary works read on by the following generations. Secondly, they correspond in part to the awareness of the mutability and immutability of a "truth", which suggests the writers' reflection on the fictional character of their own work, that is, of literature. Based on this observation, one could assume that the modern public sphere that emerged in the age of the Enlightenment, whose basic values were the truth and reason, has required paradoxically the literary mediations since its origin.
Notes	研究種目 : 若手研究 研究期間 : 2018 ~ 2021 課題番号 : 18K12346 研究分野 : 近代ドイツ文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_18K12346seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２３４６

研究課題名（和文）ドイツ語圏における公共圏の歴史的展開―近代ジャーナリズムの文化史的諸前提

研究課題名（英文）Historical Developments of the Public Sphere in Germany. Cultural-Historical Preconditions of Modern Journalism

研究代表者

西尾　宇広（Nishio, Takahiro）

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：７０７８１９６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「公共圏」という社会的カテゴリーを規定する文化史的諸前提の一端を、18・19世紀のドイツ文学に関する事例研究に基づき、「時間性」と「虚構性」という観点から明らかにした。第一に、当時の作家の自己理解には、流行の変転の中で消費される出版物の刹那性と、後世にまで読み継がれる文学作品の永続性という、二つの時間意識の間の振幅が確認できる。第二に、部分的にそれとも連動する〈真実〉の流動性と不変性への意識には、文学の虚構性に対する反省が含意されている。ここには、真理と理性を奉じる啓蒙主義時代に成立した近代的公共圏にとって、逆説的にも文学という虚構による媒介が不可欠の構成要素であった可能性が窺われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代的公共圏の文化史的諸前提に、「時間性」と「虚構性」という観点から光を当てた本研究の学術的意義は、これまで主に社会科学の分野で議論されてきた「公共圏」という主題に対し、「文芸公共圏」概念（J・ハーバーマス）の持つ重要性を再評価するための具体的展望を示した点に認められる。また、本来的にフィクションによって媒介された空間として公共圏を捉える本研究の視座は、公共の言論における虚実の境が曖昧化され、世論や社会運動の形成に際して他者の「共感」を集めることの重要性が高まっている現代のメディア環境において、新たな公共圏モデルを構想するための基盤的知見として、潜在的な社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：This research has illuminated some of the cultural-historical preconditions of the "public sphere" from the standpoints of "temporality" and "fictionality", by means of the case studies of the 18th- and 19th-century German literature.
In the self-understanding of the writers of that time, one can first point out a kind of oscillation between two time-consciousnesses: the instantaneousness of publications consumed in ceaselessly changing modes and the eternity of the literary works read on by the following generations. Secondly, they correspond in part to the awareness of the mutability and immutability of a "truth", which suggests the writers' reflection on the fictional character of their own work, that is, of literature. Based on this observation, one could assume that the modern public sphere that emerged in the age of the Enlightenment, whose basic values were the truth and reason, has required paradoxically the literary mediations since its origin.

研究分野：近代ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学　公共圏　ジャーナリズム　文化史　マスメディア　19世紀　時間意識　フィクション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）　西洋の文化史・社会史において、文学市場の急激な拡大と読者人口の大幅な増大とによって特徴づけられる 18 世紀は、多様な言説が書物を介して広範な人々の間に流通し、そこから集合的な気分や意見が大規模に醸成されていく可能性が開花した点で、まさに現代の情報化社会の前段ともいうべき革命的変化（「読書革命」）を経験した時代だった。こうして成立した新たな社会空間の総体を「市民的公共圏」と呼び、その歴史的変遷を跡づけたのが、J・ハーバーマスの主著『公共圏の構造転換』（1962）である。ハーバーマスの診断によれば、文学や芸術についての議論が交わされる「文芸公共圏」から、やがて政治的な「世論」を形成する「政治公共圏」が発展し、さらに、そうした啓蒙主義時代の「文化を論議する公衆」が、19 世紀の資本主義の進展に伴って「文化を消費する公衆」へと変質・凋落したことで、かつての公共圏の批判的機能は失われたとされている。もっとも、啓蒙主義の規範的言説に依拠する形で理想化されたハーバーマスの「市民的公共圏」像とその歴史的展望に対しては、すでに多くの批判的検証が加えられてきた［Calhoun (ed.) 1992; Gestrich 2006］。

（2）　このような研究史を踏まえた上で、本研究は、ハーバーマスの単線的な公共圏衰退史観に対し、従来の社会科学および社会史的な研究［Requate 1995］とは異なる視座から新たに批判的な検証を加え、歴史的事例の中にオルタナティヴな公共圏モデル構築のための理論的示唆を探るため、当時の公共圏を規定していたより大きな文化史的枠組みに着目した。本研究を貫く根本的な動機となっていたのは、ハーバーマス（以降）の社会史的な公共圏論とは一線を画す、一つの〈公共圏の文化史〉を構想する試みである。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、近代ジャーナリズムを規定していた文化史的諸前提の一端を解明し、その知見に基づいて〈公共圏の文化史〉を構想することで、「文化を論議する公衆」と「文化を消費する公衆」というハーバーマス的な二文法を超えた新たな公共圏モデルを、歴史的な視野で構築することにあった。換言すれば、それはハーバーマス以来の社会科学における公共圏論に対して、文学研究の立場から新たな知見をもたらすことを意味している。

３．研究の方法

（1）　上記の目的を達成するため、本研究は、とりわけ従来の研究においては前景化されていなかった近代の公共圏を規定する文化史的条件として、「時間性」と「虚構性」という分析視角を導入した。以下ではこの分析視角導入の背景を説明する。

①　まず、19 世紀における「時間性」の問題をめぐっては、歴史家 R・コゼレックによる「迅速化（Beschleunigung）」のテーゼがよく知られている［Koselleck 1979］。18 世紀末から 19 世紀にかけて、産業革命以来の交通・通信技術の発展によって、物理的な空間は縮小の一途を辿り、人々の時間経験のテンポ自体が飛躍的に加速する一方で、同時期に起きたフランス革命を契機とする政情不安の拡大は、未来の不確定性に対する人々の不安を一般化させた。たとえば 1800 年頃に初期ロマン派の作家たちを中心として、過去や未来とは区別される「現在」という時間軸がそれ自体として独立した価値を獲得したように［Oesterle 2002］、歴史や時間に対する人々の感覚はしだいに刹那的なものとなっていったのである。文化の領域においては、趣味の変遷や流行の移り変わりの速度として顕在化するこうした事態は、近代ジャーナリズムの成立とも無縁だったわけではない。当時のジャーナリズムにとって、ニュースの鮮度とそれを可能にする情報伝達の速度はきわめて重要な構成要素の一つであったが、そもそもそれは、革命以後の時代における時間意識の変容という、より大きな文化史的過程と連動する現象だったのである。

②　その一方で、ジャーナリズムが速度を重視するようになるというこうした事態には、情報の真偽を検証する時間をジャーナリストから奪い、報道の信憑性を著しく損なうという危険性も伴っていた［Hörisch 2001］。17 世紀以降、新聞の表題や表紙絵を飾る形象として、噂を象徴するローマ神話の女神ファマと真実の言葉を伝える神々の使者メルクリウスがともに用いられてきたという事実の中にすでに、19 世紀のジャーナリズムに胚胎する事実の「虚構性」をめぐる葛藤の萌芽を確認できるが［Pompe 2012；西尾 2018］、ここで注目すべきは、ファマによって拡散される虚実の定かならざる一連の言説が、一概に否定されていたわけではなく、そこには新たな社会的現実を創出する可能性もまた予感されていたという点である。こうした歴史的知見は、事実を報じる〈ジャーナリズム〉と虚構としての〈文学〉という通俗的な区別を強く相対化するものであり、そのような展望のもとに 19 世紀の公共圏の歴史を検討し直すとき、文学者と読者のフォーラムである定期刊行物を中心に形成された「文芸公共圏（literarische Öffentlichkeit）」には、ハーバーマス的な意味での「政治公共圏」の機能（「世論」の形成）に還元することのできない、より根源的な政治的潜勢力、すなわちリアリティの積極的な構築可能性（危険性）という契機が見出されることになる。

（2）　以上のような見通しのもと、本研究では、考察対象とする時代を大きく 1800 年前後、19 世紀前半（1815-1848）、19 世紀後半（1849-1871）の三つに区分・限定し、それぞれの時代の代表的な作家およびジャーナルに焦点を絞りつつ、主に言説分析の手法に基づいて、「時間性」と「虚構性」という観点からの事例研究を行なった。

４．研究成果

（1）　第一の観点である「時間性」の問題については、大きく 2 点の成果が得られた。

①　まず、とりわけ 19 世紀前半の時代について、都市のジャーナリズム（日刊紙や週刊誌に代表される「速い」メディア）と農村のジャーナリズム（年刊の情報誌である「民衆暦 Volkskalender」に代表される「遅い」メディア）を、同時代の出版文化を規定する時間的条件の二つの極と捉えた上で、それぞれのジャーナルを代表する書き手である K・グツコーと J・P・ヘーベルの活動を中心に、当時の公共圏に参加する作家たちの時間意識の差異および世代間に渡るその変容の過程を跡づけた。さらに、「暦」と同じく「一年」という時間的サイクルを作品の枠組みとして採用している女性詩人 A・v・ドロステ＝ヒュルスホフの連作詩集『教会の一年』を議論の俎上に載せ、この作家およびテクストが、19 世紀前半の公共圏の過渡的な性格を範例的に体現していることを明らかにした。一面においてドロステは、ヘーベルをはじめとする旧世代の書き手と伝統的な時間意識を共有しつつ、「書物」という最も「遅い」メディア（および、それによって実現される死後の永続的な名声）に固執する構えを見せている。しかし同時に、彼女が連なろうとするその古典的な文学観が、ほかならぬ「女性」の文筆活動自体を大幅に制約するものであったがゆえに、そこには必然的に大きな葛藤も胚胎している。一般に従来の研究においては、そうした旧世代の芸術規範に対する「文学革命」を企てたグツコーをはじめとする新しい世代の文学観は、ドロステのそれとは対極的なものと理解されてきたが、本研究では、当該の連作詩集の分析を通じて、両者をつなぐ共通の脈絡を発掘することに成功した。以上の三名の文学者は、いずれも 19 世紀のドイツ語圏文壇を代表する書き手でありながら、 通常は互いに関連づけられることのない存在だが、そのような三者を時間意識の変容という共通の文化史的文脈の中に位置づけ、当時の文芸公共圏の前提をなす時間意識の布置を明らかにした点に、本研究成果の大きな意義が認められる。この成果は、2018 年の学会発表（「瞬間と円環 ― アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフと世俗化の時代」、日本独文学会）を経て、2021 年に共著書（『さまざまな一年 ― 近現代ドイツ文学における暦の詩学』、松籟社）の一部として発表された。

②　また、同じく「時間性」の観点に関わる研究成果として、19 世紀における「世代」の問題を取り上げ、「老い」と「若さ」という二つの価値を補助線に、当時の文芸公共圏における作家同士の競合の実態を明らかにした。具体的には、先述のグツコーと H・ハイネという、19 世紀のドイツ語圏文壇において比類ない位置を占めた二人の作家を中心に、1800 年頃に生じた時間意識の変容（「迅速化」の傾向）が 19 世紀の作家たちの世代意識の覚醒と連動していたこと、それに伴い、世紀の半ばまでは〈旧世代の老人を若者が追い落とす〉という構図によって文学的な世代交代が推進されたのに対し、世紀後半のリアリズムの時代には、そのレトリックが〈未成熟な若者批判〉という構図へと変容し、さらに 19 世紀末になると、一連の青年運動の隆盛と軌を一にして再び若者世代が台頭する、という一連の歴史的経過があったことを跡づけた。文芸公共圏における作家の時間意識について、出版物の時間性という既述の観点とは別の角度から光をあて、大きな通史的展望の開拓に成功した点に、本研究成果の端的な意義があるといえよう。この成果は、2020 年に共著書（『晩年のスタイル ― 老いを書く、老いて書く』、松籟社）の一部として発表された。

（2）　第二の観点である「虚構性」の問題についても、大きく 2 点の成果が得られた。

①　まず、2020 年に刊行された日本独文学会の機関誌特集「文芸公共圏」の責任編集を担い、特集テーマ導入のための序論（「特集「文芸公共圏」への導入」）を執筆した。同論考の重要性は、ハーバーマス以降の公共圏論の展開を簡潔に整理した上で、フィクションとしての文学が公共圏の形成にとって構成的な役割を果たした可能性を、歴史的・理論的な視座から展望した点に認められる。また、中世から現代までを扱った 9 本の特集論文を総括する作業を通じて、文芸公共圏を成立させる制度的基盤への洞察など、「虚構性」に限らない多様な観点からこの主題を考察するための糸口を得ることもできた。

②　また、「虚構性」の問題に関するより個別的な考察として、「嘘と真実」という政治的・哲学的主題系が 19 世紀ドイツ語圏において文学的・美学的に展開されていく過程を、同時代のオーストリア文学を代表する劇作家 F・グリルパルツァーを例に考察し、学会発表を行なった（「現実としての虚構 ― 嘘の歴史から見たグリルパルツァー『嘘つく者に災いあれ！』」、日本グリルパルツァー協会、2021 年）。この考察にあたっては、比較検討のための補助線として、劇作家自身が依拠する 17 世紀のバロック文学の規範（喜劇というジャンルと「嘘」という主題の伝統的結びつき）に加え、20 世紀の文学・哲学の言説（H・アーレント、J・デリダ、A・コイレ、H・v・ホーフマンスタール）を参照することで、言葉の持つ現実構築的な性格への問題意識が、前近代から近代にかけての文学に途絶えることなく伏流している実態が観察された。このことは、先述のジャーナリズムをめぐる言説史（３－（1）－②）において、ファマのモデルが近代化の過程の中で完全には駆逐されえなかった経緯を、別の側面から裏づける貴重な成果だったといえる。

（3） さらに、当初の研究計画では予定されていなかったものの、以下の 4 点の研究成果によって、19 世紀の公共圏の文化史的展開を捉える上で有効な視座を得ることができた。
① 1800 年頃に活動したプロイセン人作家 H・v・クライストと「政治的なるもの」を主題とする共編著書（『ハインリッヒ・フォン・クライスト ―「政治的なるもの」をめぐる文学』、インスクリプト、2020 年）の共同編集に加わり、この作家と同時代の（とりわけ）政治公共圏との関わりを精査する機会を得た。個人の研究としては、フランス革命後の混乱期にあって、旧体制下の君主制と新たに台頭する市民的価値観との葛藤の諸局面が、クライストのテクストにおいては〈君主〉の形象として書き込まれていること、その上で、一連の〈君主〉の描写には同時代の政治的言説に基づく論理だけでなく、それと連動する形で物語を推進するための詩学的な論理も働いており、それによって政治的主題と美学的形式が不可分に結びついていることを、作家の複数のテクストに即して例証した。また、それとあわせて、海外で発表された近年の重要なクライスト論の翻訳を行ない、同書に収録した。本研究成果は、クライストという同時代の文学・思想潮流の中で特異な位置を占める書き手を起点に、1800 年頃の文芸・政治公共圏の一断面を切り出している点のみならず、「政治的なるもの」という主題のもとでこの作家を多角的に論じる試みが日本において類例を見ないという点においても、学術的にきわめて大きな意義を有している。
② 19 世紀後半のヨーロッパで広く流布した「社会ダーウィニズム」の言説を主題として取り上げつつ、ドイツ語圏におけるその最初期の紹介者である自然科学者 L・ビューヒナーを例に、公共圏における科学的言説の意義について検討する学会発表を行なった（「社会ダーウィニストの夢と憂鬱 ― ルートヴィヒ・ビューヒナーを中心に」、ASLE-Japan/文学・環境学会、2019 年）。生物学の一理論であるダーウィンの進化論を、一種の社会理論として転用する社会ダーウィニズムの発想は、それ自体が高度に虚構的な性質を持つ疑似科学的な言説だったが、にもかかわらず、そうした言説が当時の社会に強い影響力を持ちえた事実は、科学的言説にそれ自体として「真実らしさ」を生み出す効果が備わっていることを雄弁に物語る歴史的事例である。これによって、社会ダーウィニズムという社会現象が、とりわけ前述の「虚構性」の観点から公共圏の条件を考察していく上で、重要な手がかりとなるものであることが確認された。
③ 同じく 19 世紀後半に流行した「家庭雑誌」という雑誌ジャンル、とりわけその先駆的事例と目されるグツコーの『家のかまどの団欒』誌を、同時代の家族像およびジェンダー規範との関連で考察する学会発表を行なった（「家庭のなかのニヒリストたち ― 19 世紀の家庭雑誌とカール・グツコー『家のかまどの団欒』誌」、日本独文学会、2020 年）。それによって、しばしば「母性主義」とも称される 19 世紀末の特異な女性解放運動へと通じる大きな文学的・文化史的水脈を発掘することに成功したが、この知見は、19 世紀の公共圏における女性の参加の問題、および、公共圏と親密圏というしばしば対立的に捉えられる公私空間の関係性を歴史的事例に基づいて具体的に考察するための分析視角として、貴重な成果だったといえる。
④ 19 世紀の前半から後半にかけての文芸公共圏の歴史的展開を通史的に観測するための視点として、「世界文学」と「コスモポリタニズム」というキーワードを設定し、19 世紀の作家たちが国内および国際的な文学市場との関連で抱いていた自己理解を検討する学会発表を行なった（「「世界文学と人間性」あるいは「多様性における統一」― 19 世紀におけるコスモポリタニズム言説の一類型をめぐって」、日本独文学会、2021 年）。前述のグツコーに加え、J・W・ゲーテ、B・アウエルバッハという三人の作家を具体例として、通常は対立的に捉えられる「世界文学」と「国民文学」の言説が、19 世紀においては相互補完的かつ相似的な関係にあったことを示した本発表の意義は、当時の公共圏の機能を国内的かつ国際的な地平で考えるための展望を開いた点に認められる。

（4） そのほか、本研究を補完する仕事として、海外で発表された重要文献の翻訳と紹介を行なった。
① 公共圏の哲学的側面に関わる「共存在」論について、当該分野の重要論文を共訳の形で翻訳・発表した（ヴェルナー・ハーマッハー「《共に》について／から離れて ― ジャン＝リュック・ナンシーにおける複数の変異と沈黙」、月曜社、2020 年）。著者の W・ハーマッハーは、現代の哲学および文学研究に多大な功績を残した碩学だが、日本ではまだほとんど紹介が進んでいない。今回の翻訳には、公共圏論の枠組みにとどまらず、今後の日本の哲学・文学研究一般への大きな貢献が期待される。さらに、これとあわせて、2017 年に他界した著者に寄せて盟友 J＝L・ナンシーが書いた追悼文の翻訳も発表した（ジャン＝リュック・ナンシー「私は言葉もない」、同上）。
② ドイツ語圏では一般に「三月前期」と称される 19 世紀前半の政治的・社会的・文化的状況を包括的に記述した最新の研究書の紹介記事を執筆し、日本独文学会の機関誌に寄稿した（「［新刊紹介］Norbert Otto Eke (Hrsg.) im Auftrag des Forum Vormärz Forschung: Vormärz-Handbuch」、2022 年）。同書のような重要なスタンダードワークの紹介は、国内の研究の将来的な発展に大きく寄与するものと評価できる。

（5） 以上の研究成果によって、当初の研究計画で想定していた目的については一定の達成を

見ることができた。とりわけ「時間性」の観点から、19 世紀の文芸公共圏をめぐる大きな二つの通史的展望を提示できたこと、さらに、研究遂行の過程で浮上した新たな論点も含めて、当時の公共圏の文化史的文脈を多角的に検証できたことには、大きな意義があったといえる。その一方で、こうして得られた具体的な歴史的知見を、新たな公共圏モデルとして理論的に昇華するまでには至っておらず、その点は今後の課題として残る結果となった。また、とくに「虚構性」の観点については、文献調査を進める過程で、狭義の文学研究にとどまらず、哲学・美学・社会学・政治学といった広範な分野において、近年あらためて注目の集まっていることが確認されたため、より包括的な視野に立って公共圏という主題との関連性を精査していく必要がある。

その上で最後に、本研究によって得られた新たな展望についても言及しておきたい。文化史的な視座に立って遂行された本研究では、公共圏を構成する諸要素のうち、一貫して文学的な言説を焦点化することとなったが、それによって、かつてハーバーマスが提唱した「文芸公共圏」概念を再評価するという学術的な展望が開かれた。ハーバーマス以来の社会科学における公共圏論において、長らく「政治公共圏」の単なる前段階として過小評価されてきた「文芸公共圏」という主題系、換言すれば、〈公共圏の文化史〉という視点から文学というメディアが公共圏の成立にとって果たした構成的な役割を明らかにする研究は、学術的にも社会的にも意義の大きな有望なものであると思われる。19 世紀の文芸公共圏への多様な角度からのアプローチによって以上のような展望が開かれたことは、本研究の最大の成果であったと総括できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 西尾宇広	４．巻 164
２．論文標題 ［新刊紹介］Norbert Otto Eke (Hrsg.) im Auftrag des Forum Vormaerz Forschung: Vormaerz-Handbuch	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ドイツ文学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ヴェルナー・ハーマッハー／針貝真理子（訳）／西尾宇広（訳）	４．巻 2
２．論文標題 《共に》について／から離れて ― ジャン＝リュック・ナンシーにおける複数の変異と沈黙	５．発行年 2020年
３．雑誌名 多様体	６．最初と最後の頁 273-337
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ジャン＝リュック・ナンシー／針貝真理子（訳）／西尾宇広（訳）	４．巻 2
２．論文標題 私は言葉もない	５．発行年 2020年
３．雑誌名 多様体	６．最初と最後の頁 347-353
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西尾宇広	４．巻 160
２．論文標題 特集「文芸公共圏」への導入	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ドイツ文学	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名
西尾宇広

２．発表標題
現実としての虚構 ― 嘘の歴史から見たグリルパルツァー『嘘つく者に災いあれ！』

３．学会等名
日本グリルパルツァー協会（招待講演）

４．発表年
2021年

１．発表者名
西尾宇広

２．発表標題
「世界文学と人間性」あるいは「多様性における統一」― 19世紀におけるコスモポリタニズム言説の一類型をめぐって

３．学会等名
日本独文学会

４．発表年
2021年

１．発表者名
西尾宇広

２．発表標題
家庭のなかのニヒリストたち ― 19世紀の家庭雑誌とカール・グツコー『家のかまどの団欒』誌

３．学会等名
日本独文学会

４．発表年
2020年

１．発表者名
西尾宇広

２．発表標題
社会ダーウィニストの夢と憂鬱 ― ルートヴィヒ・ビューヒナーを中心に

３．学会等名
ASLE-Japan／文学・環境学会

４．発表年
2019年

１．発表者名
西尾宇広

２．発表標題
瞬間と円環 ― アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ『教会の一年』と世俗化の時代

３．学会等名
日本独文学会

４．発表年
2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名	４．発行年
金志成（編）／香田芳樹／西尾宇広／小野寺賢一／川島隆／宮下みなみ／山本浩司／関口裕昭／松永美穂	2021年
２．出版社	５．総ページ数
松籟社	466
３．書名	
さまざまな一年 ― 近現代ドイツ文学における暦の詩学	

１．著者名	４．発行年
大宮勘一郎／橘宏亮／西尾宇広／R・クリューガー／G・ノイマン／W・ハーマッハー／H・ベーメ	2020年
２．出版社	５．総ページ数
インスクリプト	364
３．書名	
ハインリッヒ・フォン・クライスト ― 「政治的なるもの」をめぐる文学	

１．著者名	４．発行年
磯崎康太郎（編）／香田芳樹（編）／山本賀代／西尾宇広／川島隆／坂本彩希絵／松田和之／野端聡美	2020年
２．出版社	５．総ページ数
松籟社	285
３．書名	
晩年のスタイル ― 老いを書く、老いて書く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関